



忠孝以玉傳
參

3
987
8



明 淨 3
981
3



忠孝比玉傳卷之三

第八回 本行寺有花儀吉挑玉江

養拙菴主人著



道心の中（道心の中）衣食ありと去（去）本行寺日泰上人道徳優
且ぬふ（且ぬふ）海濱七里の村落ハ（海濱七里の村落ハ）近国世宗の者
道心（道心）皆其情（皆其情）行と慕ひ一度法廷（一度法廷）は待（待）師（師）の説法と徳
後せん（後せん）と願（願）て（て）さ（さ）ら（ら）ふ（ふ）一（一）堂（堂）前（前）より（より）一（一）古（古）井（井）あり（あり）水（水）涸（涸）て
く（く）常（常）に（に）渴（渴）む（む）堪（堪）ざ（ざ）り（り）と（と）上（上）人（人）一（一）朝（朝）井（井）上（上）は（は）臨（臨）み（み）一（一）首（首）の
湯（湯）公（公）作（作）り（り）符（符）呪（呪）し（し）て（て）靈（靈）泉（泉）茲（茲）膚（膚）沸（沸）擁（擁）護（護）天（天）龍（龍）在（在）長（長）引（引）妙
法（法）声（声）廣（廣）宣（宣）流（流）四（四）海（海）と（と）唱（唱）へ（へ）ま（ま）に（に）井（井）水（水）忽（忽）沸（沸）騰（騰）す（す）る（る）と（と）文（文）餘（餘）



三





曝布の如く響響て日夜東西に奔流するを可憐なる故
 山門の便利たるをうらやみ、村里の賑昌むく、超絶の
 毎年の月下旬ハ、數百の僧侶と聚め恒例の萬巻陀羅
 匠修仍あるより糸指の男女肩を摩つと社公六人、
 振下りまき夏云計らう、境内數頂の地ハ線索傀儡扮戲子
 水人上竿伎の軍勢のく、場公區へ講し、さる鼓吹の音ハ
 遠近に響く、自ら兒女の心を興す、項も眩しき、
 の夕仍修し庭前數株の桜花を香移るくとも、池辺の
 棟崇ハ今と盛し、閑亂て隈くは黄令のを、侵干る名上
 紅絹張る映山紅假山は燃る発新楓玉に、あのが深紅を競

顔する所くの茶店、小多少の極客木の下、幕お廻し
 或ハ芝上は紋花遊と、酒か酌み、飯筒分盒、
 たるさる、何は清貞の、をわづらひ、
 後あくる生質清く、婦人の孤孀と見え、
 が破れ、許るる少女と伴、不鬢二人、奴僕を従へ、
 僻洋野小亭、憩ひ居る、さる乙女の風流、日影目映、
 うる情帽の、大なる一輪牡丹、金紋と挿し、白輪子に
 松竹梅と繡る、井袖と、彼紺純子の、帯と、
 締め、かのづら、況、落雁の面影、ハ、
 十二分の、姿、を、り、り、り、折、
 前、面、を、り、年、甲、十、六、七、七、

あつらひ 髪彼而 髪の羨ゆ 年皂光 給の外套 ありて 襖子よ
茶亭の 袴公 閑雅よ 若く 襟柄の 両刀と 佩び 跟的よ 牛
券網の 少袖 袂と 進せ 是も 寺内の 花んて 本坊の方
より 歩み 来り 茶店 の 燈あぞ 体 ぬ 其 容兒 の 美 麗 の
うづ 公子 小も 襖の べら びら 形勢 あり 是は こと 是 氣の 衰
若藤代 平内 男 あり 若吉と 叫 彼 千の の ころ 時よ 庭
面の 桜花 春風 の 下 して 木 の 下 寒か ねど 空よ 志 是
ぬ 雪の 如く 池の 上よ あり かる 少女 最良 思
久ん 湘簾 と 挑つ ち 笑う 外 面と して 覗き みる 是 紅
縁の 周縁 あり 儀言 ぐる 園亭 の 方へ 狼顧 する 恰も 紅

見合 せらる 偵 少女 の 怕羞 や 満面 通紅 うち 入ぬ まで とも
儀言 なる 疑 窺い 忽 春情 発し 世よ かる 婀娜 も 有る
よと 一盞 茶時 惘然 と して 居る ころ 頼る 懐中 あり
一枚の 短冊 あり 墨斗の 筆 あり 良案 あり 一首の 歌 あり
縁に 那方 の 亭の 下 なる 桜花 の 枝よ 結び たる 簾の中
や 微言 して 向の 茶釜 髪 なる 婦人 進と 離さ しく しく
庭よ 下り 立 彼 短冊 と 手に とり 簪 あり 花の 大袖 の
名 鏡 曇る や 風の 仇 物 あり と ち 返り 吟 あり
よ 海と 會 ぬ 歌と 六 知り ころ 其 少年 の 人品 非 常 あり
よ 感情 の 行 行く あり あり 女 兒の 佳 塔 あり あり

ともねぐさくさる標致ありくるものごとく
 不髪よ命ト儀吉が方への贈りも何地の内方
 知り侍ねど只今市口号の二十文字何知ぬ
 洒家も絶て面白くこそ羨り以願くハ今日の家
 下しるらんやと有ま儀吉ハお笑ひとて
 仰更るの固り哥道未始の小子口は出終の
 比見せのハ傳は恋愛以併し由笑の種も相成
 角も然るべしと返報あぞ不髪短冊と解めて
 恭しく婦人の前よさ一函も呈る微笑うぐ
 お縁つ少女は通し和正平生和歌公好め伊

源氏の物語も大凡の續るは侍りたるらん
 せが鞍のふふ李とのりくとす侍も有とと
 たるふも成ぬべし今は返し歌ありてんとい
 お振と公の仰更あはれども五月畷の田植
 の唱さるば聴覚へ侍とども登るも難き大和
 らん留のよ示葉さるあひ熱めぬ恙の唯此
 下ささうと有は否く左中侍りいらす其意
 通るるが河の終属ハ年よめ人の許させぬ
 少女ハ會釈あつら料紙引し短冊とて濡る
 墨さ濃の便もを修書てさし出せば母の

二度花王へ結びたる儀吉の立寄りと一仇と云ふ何夕風の
 憂ありあつて幾つと云ふ花のゆめと再吟しうらむ女
 かたどおん中と歌いえより母跡の優美き通はるるみけ
 短冊の其まゝよ小子が中受へと懐中すまは嬉し氣は
 乙女は起て我を子言寄らんと傲らるるが母の前庭と
 今更何と夕經の鐘の音は母親の儀吉は對ひよとつと
 郎君の心敵の周りく始く此目は夢りるら此下見も
 皆みず虚氣うら夏ぐらひとくは許させぬととと
 中ふ由もはびびるは實なる測は所なくは知人は相つ
 志ぞ脱くくは縁も有るは又重く此目は掛やへ

挨拶すまは許させぬと云つて従係を伴と其
 場へ起て後吉は少女の心鬼さましく留念も寺の方幾振
 返りえりて不覺我家へ帰らるる跡は送つて後吉は
 茶店の小二よろもち對ひ今の女侶ははりよは思ぬ風俗
 何とこの町の者やんと尋よ小二篠直一小亭は隣村
 曾我井の者よひがは實邑は親族あるとて彼人達の縁故
 亦委美つと云ふ元ハ千葉家の家臣夫の栗飯原隼人妻の
 初瀬嬢は玉江とや人のうら先年主人康胤殿へ連言は
 縁は離れは生実退隱が隼人どの程うら病死して
 婿暮しよひひ去ど貯金の多し是有しや年々幾



許の田畑を買え今、使も衆多ふと豊成百姓を
 何の願更もあるや、本行寺の鬼子母神へ毎月縁日
 結らると、結まば儀吉の点灯で夫の殊勝なる事なりと
 耳寄結も、わくの頼、僕夫の命、小二は歌錢とよへつ。最
 早歸宅の遅しとして堂見戒淨坊の菴と訪ひ其夜、夫の
 止宿せり、且祝儀吉ハ其後、とむ江が夏のと、因、と
 遠慕の情止時、かの茶店の小二が、結と七月老の詠
 言、ゆくと鬼子母神の縁日は至ると本行寺は結らると、果
 して遠く、再び玉江親子の者、逢ふと、まに、結ひ限の
 う、過、花見の折ら、の、と、緩、地と結、と合、目、と

何と、別、と、其、鬼子母神の縁日、相見を
 何と、儒髪の一、度、二、解、と、夜の、
 結、と、終、と、中、と、ける、と、人の、
 流、と、成、と、坐、見、戒淨坊、世間の、
 儀吉、と、對、と、強、と、教、と、戒、と、と、
 今、更、羞、恥、や、本、行、寺、へ、詣、る、と、
 十、才、鏡、容、顔、も、漸、と、衰、へ、つ、と、
 如、く、見、へ、よ、る、と、平、内、夫、婦、ハ、と、
 一人、の、愛、子、の、目、に、其、心、を
 疼、め、居、る、と、戒、淨、坊、は、と、と、
 子、細、密、な、夫、婦、は、結、つ、と、
 二人、の、大、い、な、
 鶴、さ、と、若、代、り、と

是あつて。第一主君へ對し不忠の事。且諸家中へ出入り
 面目つた。夏より。元行くと。何れ縁談あるべき。身うまを
 今存名のて。さう内。彼の家のまは。平くは。方へ。聚
 ぎ。ものごと。内。ま。江。が。夏。人。を。憑。り。て。咬。合。け。ま。ハ。ハ。十
 葉。家。の。歴。々。々。の。食。疑。ひ。る。け。は。縁。女。の。貫。ひ。苦。し。か。る
 ま。と。媒。と。頼。り。彼。方。は。言。さ。ら。る。王。江。が。母。ハ。兼。て。儀
 吉。う。と。委。く。知。ら。る。う。人。家。ふ。ハ。次。男。も。あ。ま。バ。相。續。し
 夏。う。く。ま。と。何。夏。う。く。嫁。入。と。許。し。ら。ま。平。内。丈。好。き
 大。は。悦。び。主。君。へ。願。と。あ。も。吉。日。と。撰。み。儀。吉。よ。え。彼。を
 束。と。改。名。さ。せ。遂。了。王。江。と。し。実。う。り。途。へ。と。り。完。姻。首。尾

克。整。ひ。たる。固。く。思。ふ。同。士。の。女。丈。う。ま。バ。正。に。睦。ま。う。く
 明。暮。父。母。へ。孝。順。よ。夏。へ。る。愛。よ。奇。異。う。る。夏。の。有。し。か
 或。日。平。内。が。妻。山。川。之。遠。野。戒。淨。坊。の。便。宜。う。ま。さ。ら。り。逢。ぬ
 一。く。新。婦。玉。江。と。伴。ひ。本。行。寺。へ。詣。り。帰。る。ま。本。坊。へ
 寄。奉。師。よ。見。奉。ら。し。師。の。日。頃。愛。し。飼。め。ふ。野。の。猿
 猿。先。は。接。び。居。り。る。が。獲。と。親。子。が。傍。へ。あ。り。ま。江。が。ま。る
 振。袖。と。紫。の。大。は。泣。叫。び。る。親。子。の。者。ハ。あ。う。と。驚。た
 あ。へ。ら。ま。う。泰。師。侍。者。は。裸。と。獼。猴。と。追。う。せ。ら。る。其。後
 啼。止。ま。ら。斯。く。親。子。の。者。ハ。師。よ。眼。を。み。ま。り。ら。ん。と。言。す
 多。る。時。上。人。の。誓。し。止。め。ら。し。机。の。上。より。自。一。箇。の

卷軸と持たせりるひは貧道が書字する所の法華壽量
品より今まはよふま真心を激して平日飢身離き所
持たせりと有るまは親子ハ実有難く拜受りてぞま
る。誦まろく戒淨坊とるま今日不図我が飼猿の玉江と
袖と蒙衣叫啼くる髪髻とて人の喪は居る有む
必迎きよら親子の看は憂患の契あるべし我をこ
観るよ行く劔難の相あり故は我是ともぬま
よ書字の經文と授りてのめひぬ必竟玉江が男のう
ひ後のりる契りある且下回の文解と成り

作者邦文曰儀吉が玉江と夢想する偶少集の情

るりとの人も其迷戀は堪はず病を焦悴し
武人の場をうすず又初願が女兒と教育する道
ある契を知りず徒は勢治源治木の歌書と續く色
情の媒はうす悪むべし噫平飯食男女ハ人の大欲存
甘り一度見よ満する時ハ忠臣も忠と遠る契を得る
子も孝と全ふすると終りず慎べし

第九回 東馬落魂仕妓井定

却脱とて東東馬とてさゆのあつえハ裁前の朝倉
臣のうがは質浪疾ゆて常は博奕酒色と好む
柳は達しけるゆゑ動すまは巴が武技は儼と人と剛

及ぶるの數回ありて。相公より。蕃居ヤ。解らま。却て高
 景公。非滂せ。ま。家内。候。所。り。國境。り。選。及。せ。れ
 け。ま。今。世。の。中。何。國。へ。移。り。我。が。武。道。と。以。て。録。を。得。ん。と
 最。易。先。國。東。を。越。へ。と。單。身。東。海。を。下。り。南。く。出
 藏。の。國。に。抵。り。る。當。時。里。見。の。勢。ひ。長。強。と。ま。去。り。去。り。て
 二。兩。總。と。經。廻。り。安。房。に。出。て。早。見。氏。に。属。せ。ん。と。ま。下。総。の
 國。千。葉。並。に。さ。り。掛。り。る。野。中。に。て。二。人。の。緑。林。に。出。逢。ぬ。され
 ども。え。身。を。敵。の。東。に。り。ま。復。と。も。せ。ず。終。に。盜。賊。二。人。を
 斬。殺。し。却。て。彼。等。が。懷。中。に。搜。り。け。り。圓。金。五。枚。有。る。ま。は
 大。に。喜。び。長。途。の。旅。に。あ。て。諸。費。已。ま。り。か。つ。り。今。日

幸。に。盜。人。に。出。逢。終。之。で。黃。面。菩。薩。に。拜。ま。り。復。必。竟。神。佛
 の。加。護。を。り。と。強。つ。き。終。奪。ひ。取。ま。日。ハ。上。総。の。土。氣。城。下。へ
 漂。出。後。其。亭。に。宿。り。け。り。が。昼。日。落。州。に。逢。し。時。曠。野。の。棘。に
 て。脚。を。傷。る。由。急。疾。の。愈。り。ち。暫。く。此。に。逗留。し。後。の。勞。と
 休。ん。と。懷。中。に。金。の。増。々。と。頼。り。毎。日。酒。肴。を。買。い。打。喫。し。
 醉。り。ま。り。て。己。が。武。技。に。傲。り。千。葉。並。に。出。逢。ぬ。盜。賊。と。討。捕。し
 活。る。ど。て。居。り。る。に。締。忽。人。の。巷。院。と。ま。り。城。五。坊。井。邊。活
 の。身。に。達。し。ま。ば。支。ち。極。め。て。武。者。修。行。の。者。ら。ん。今。の。世
 一。人。も。も。勇。士。の。欲。き。時。り。先。を。者。と。る。寄。せ。器。量。を。死
 上。拍。へ。と。後。亭。に。使。者。と。ま。り。東。馬。喜。び。思。惟



我是近房州へ仕官の志のまじりども差當り其地は洗容の者
もてもる一且ハ國王士と待の善思も未知難けまが野徑食露
さ厚く何國へ仕るも同じまると直は招きよ懸下城
内へぞおまらる領主は彼が容兒と見らるるは年甲壯許
あて身丈六尺の迎へて面色赤くして眼尖く口方にては倉舞
あつと骨柄通一敵國の當りまの形容するに惑まけけん
東馬退去の後早速東金うる父入及空隆の方へ中送られ
ける入及委細と波は使者を招き今般處士とまするもの
る拍あまや誠余た名士と得るものハ國家のお大將の誓言
うのまのいども凡て士と誓言るよま賢不肖と知らざる時ハ

國人皆可用と云て用之とも波は得と老臣等とま波しとの
後免も角も然るべしと挨拶有るまが空路則梅藤代年
内と始め老臣と集め其夏終下らまらるる平内一益茶時
深念し今彼が所しは實委しく知らずまのいども既ハ少荷
内へぞおまらる若其仕官と障る時ハ彼が出世と待は似る
と思ひまらるる野徑の上へ食露三百石と以て拍へるるで方見
けま終は後日の讐言敵とらるるのまらるる東馬固つ仕官の
初るまが常は好める飲酒と止め傍輩への意對もま接續
讓よ勤けりまらるる自はまらるる人の物論らるる家中まらるる
劔法の門人らるるのまらるるまが頼東金と得見行まらるる最

一箇の大夫のつらつら小ぞ入道侍と顧みては平山勘
 六ハ我草創の時忠貞なる者なり一が先年戰場あて陣
 没く家系絶ぬを哀と歎こく今新系東馬とんり
 其人物中く勘六が苗跡と續すをも知ぐくやあされ平
 山氏と奥すべきものゆて夫より東と改め平山東馬と喚
 せける噫容色と以て人と取ら賢者の辨る所但冷例の
 空隆東馬が人相は過まてて実よ智者の笑るあお
 東馬の漸く多身一已は小荷内劍術の師範とぬれ
 元來恬慢の氣負ひ包と終りて自らを傍輩と蔑如く
 してとく再び酒色は耽つて寡居の寂くても堪ずのつと

さて姣麗なる女と娶らしもの心ぬるうち下総生ま
 ての所は郷士の娘王江が艶うらうときて氷入と損み縁
 梁と言入るまども洞いざうらうが本意なく思ひ居る所
 其後家差平内が東方へ王江と娶りてりとき東馬
 大に発性し矮き妻郎が挙動するた縁づくるまふその娘
 他へ嫁するは是非も人もなき中よは方家先方へ縁付
 るとてそ外も是平内已が権威は傲て我新系うらと慢
 這方の蕪で縁後有し更知らうから是れとくは皆姻あり
 志と見へり已は遺恨いつら晴す時も有べと常は猶
 中よ伏し居るなり小荷内の侍中よ澤井軍治といふ

者あり近頃東馬が勅術の門入らうとて是亦奸佞邪智
 なる性にて同氣相求らうとて尋常は東馬が方へ出入交
 つ最深りのなる是より向は藤代東が前髪を以て美藤か
 男色は迷ひ折る情書贈つとて東敢てまては觸す
 捨ちたるが尚さら怒書の塵積るゆて今ハ臆暗思ひ人
 の足野あて軍治は對の足下是を時向小子へ殷勤の情書
 寄せらるる夏身よりの柔いと云へども小子ハ當家老臣の
 男ありの不時の夏有時の同苗の名を以て且ハ諸家中
 の淀も相立ず必思ひ止らうとて人けらるる夏あらば足下の
 子も相立ずと痛く返答せらるるは没理會獨

心中の志のつあもして熱腸を冷んと思ひたる内近頃東
 馬が折る平内と被する林と見えたる笛吹んと思ふは
 且或日飲酒後軍治碎る振あくる東馬は對の如何は先生
 人ハ知らざる物なり當館の梅平内なる宛里の蝙蝠と
 かりと一書籍續つると鼻よりけ動もすまの改定の症
 濟のとる慢一上へお後忠臣顔は見えども内心の甚だ
 賤しく世を嫉み猜む気性なりと云へば東馬如何のも足下
 の言ろく通り這奴己く武道の拙と隠しこめ平内は紛漢を
 語とて奇怪なま今も見えぬあの如き奴ハよハ戦場とのみ
 時ハエテ聖人の危と嫌はるるどぬく屋を振て人先よ逃る

考ありと冷笑へ。做就つるを軍治いさ。寄師の親も同
とやせが其がし底包すやべ。必他言いさ。是も渠奴先生の
斬く秀らま。已下。予山の名跡と名意あると。忌後ひ。二筆
せと種々の諧と構へ時間相公へ。澹舟中。相公も渠が
佞女よ惑且其故先生への施服も。迎まの稀より。うり。
其上ま。こん悪さ。あて先生の縁後。女を知つ。向へ
彼とと言散ら。遮て。已が男方へ。迎へ取。り。か。る。佞人
重職よ有内。群國の表微行。く。相公の為。も。相。ら。す。
早晚先生。劔法。は。秘術。を。以。て。渠。奴。が。五。針。を。不。遂。を。と
見せ。つ。め。つ。が。家。老。職。の。奉。る。目。前。尤。先。日。も。老。后。勅。目。の

家の道は。筋。及。つ。す。ん。の。先。生。へ。仰。せ。解。ら。る。心。定。ま。り。と
い。が。東。馬。笑。壺。よ。入。り。我。も。左。と。思。ふ。り。お。と。あ。ら。め。と
ま。密。く。結。し。て。軍。治。ハ。別。是。ぬ。り。と。る。
第十回 君前代試平内撃倒東馬
其後端午の佳節とて。土と氣城中。家老始。緒士。殘。り。ず。出
仕。嘉。後。と。述。け。る。折。ら。ら。城。ま。ま。空。路。各。う。酒。宴。と。場。を。後。會
世間の流。よ。か。れ。梅。平。内。よ。對。の。予。戰。争。終。る。時。ま。け。れ
船。夕。馬。の。業。よ。の。み。を。寄。せ。未。だ。可。流。因。雅。と。い。ふ。夏。と
知ら。ず。迎。項。世。の。始。ら。し。き。牽。牛。花。を。植。栽。し。流。仍。す。と
は。是。を。以。て。觀。る。ま。も。う。り。と。有。り。予。内。仰。の。ご。く。相。公

物志の時、遇武術の外他、莫く樹木草花の樂を嗜み
 めるものごとく、富貴く覺への尤、迦牟牽牛花を植栽し、
 西京より始まる、辰東よ及び好喜者、年々奇と種ひ巧を
 年々種くの名花を出一、只今、都鄙とも盛ん、
 先年世上、多地皮奈と、然ひを後、名草菊花、
 俗にも時世の流行、社之、迦牟、賤息、他より、
 數種、莫ひひか、凡、休息の清、息、す、相成、
 一、有、ま、傍、う、平山、東馬、是、ら、
 當時、牽牛花の、流、流、必、竟、
 愛、年、へ、物、う、何、為、う、
 其、終、物、も、期、
 其、終、物、も、期、

前よ愛ひ潤む是れ、
 掛、底、意、の、
 悪、
 吟、
 公、家、
 若、
 屈、
 義、
 名、

弱総剛と稱く松栢ハ残色易く柙の技ハ聖折する一進
王と知て退きと知らざるハ是緒突匠夫の所爲実の勇若
と云へらざる有文武者ハ必武備と言へせが東馬と勵
て理屈は拘つて敵と怯つて六王戦ひのりやさずと平の面
色念一々隠拒ハ澤井軍治相公の前へまどつ入今兩士の
争論何をも理有之より賞への尤平内ハ兼て文武の達人
まゝ東馬も年壯といふども劔術少て仕官の身去ども
小的們是年までのまゝ劔法の善悪と知らず必究口談を
無益の言する願ハ吾儕武藝演武の爲にも成り幸の
今日ハ苜蒲の嘉儀也前丁於て兩公劔術の試合作付られ

いふ此慰も相りの且小的們も大受存いと勸まが
空のいさる今日ハ苜蒲の佳節兩人共我前も劔術の武
合ゆるべしと壯氣の相公の一言は平内ハ豫て兩人が詐術を
知らず詮る死言とと思ふども君命更ハ背難く奉畏と也
答ハ東馬も笑片面同く兼知仕ると答る間も中殿の
士竹批持方持持るる兩人が前へさし立共よ起て肩衣の
前及除て拽扎裙子淮南おもむく小衛内と始り列居る諸
士中も東馬が門人ホ息と疑して後觀す東馬竹批と上
段は構へ去來を承らふといふ間もさくゆつと一受平内が顔會
の上より打下せむを得たりと受流し籠手を搔んとがと



俗諺
 小七
 をふひて
 得
 長ひ
 秋の風

熱まが返してまろしと打合す各々練の早業ら春と惜める
燕子の風は翻るる異つるすが閃閃くと刃を交し少許後
負見得ざうとが如何きけん平内が清眼は構へる竹批
礮と取落せば得るるとお込む東馬が照燧の石を出る
早く跳込まづ偏手あて臈を薙まばを促し前へ互礮と
倒るると落るる竹批あつ取て三ッ四ッ強くお居まば衙内と
始め列ゆの緒士どろと一同は稱美を必す空治平内は打
撃の今よ始ぬま方が老を耻ぢる今日の活動未損母く
くと言つ諸士は臈を賜ひ奥をさして入るるは除は東
馬ハ如流逃と塵お拂ひ起上ると弟子のる前面目ろく

何と諄も赤らむ頼軍路も口とあんざりとも果して其るる
くとして廳さして退ひす

第十一回 東馬結黨音信山殺平内

且説き頃安房の大守里見義弘より坂井家へ使者を以て
先年常陸の画師聖村辺國遊麻歩の折より大亂し来たると
城に定隆が需よ應じし所聖舟渡唐の時明帝の詔書
本朝の偶嶽と馬を急仲和らるものをも上は登とせし
其の原幕駕し子へる等勢を所し劣らざるうと
一見うつて由中送るるとまは定隆父子承り是より
即可入貴覽趣回答のてまはける定隆後で館山城下

名譽の具足師有る。彼及まじきが幸真善路二領持々
 思ふに違も使者ハ外人あてのつづらずと則西田兼隆
 平内は聖村が馬一富士の二軸并は馬料として金子二百
 兩通與へ委細は付属らまける。然るに平山東馬ハ先相
 公の前まで較量は打輸しより人前を耻ら病氣と言
 立引籠居居る所一夕門入澤井軍治竊は訪来り扱
 先生は向殿中の試合ハ勝負ハ時の運と云やうから借も
 外はのちつらう是から渠奴のく已が武技は優り上
 見ぬ就馬と人と輕視しる慢すべし我等かゝる奴は勤
 仕て行末憑きも有づらうと懐かき東馬

小声よろ言る如く不佞は度の恥辱を魂は轍し残
 念のり野徑當館は仕官するはけむる萬望計畧を以て
 渠奴と討果し他国せんと思ふこと詰むる軍治は死
 方便あり這番安房の國に當家は是である聖村の
 画一見のり度使使者を来せり就て主人鼓山の師
 某は具足と逃へんと平内は彼の一軸と金子二百兩總け
 明後日出立の由まが小子先生は援かり徑路は待休
 て討果し画金とすも奪ひ取べしと云へ東馬大に
 實のり内縁もこそ是を足下と格別入懇いせしは上
 何国へ起退身と寄可るとも折言ては死を共よすべしとあ

且六軍治篠直（直）一（一）御刀（御刀）と執持て膝（膝）と刺（刺）が東馬
 も同く臂（臂）と裂（裂）て血（血）と絞（絞）うと（と）杯（杯）。滅（滅）きて平（平）の飲（飲）の（の）巴（巴）よ
 兄弟（兄弟）の（の）罪（罪）と（と）一（一）其日（其日）と（と）こ（こ）の待居（待居）り（り）去程（去程）は平内ハ
 安房（安房）へ登程（登程）の時（時）は（は）ふ（ふ）る（る）未明（未明）は興（興）て旅（旅）の（の）綱度（綱度）を
 一（一）運家（運家）は命（命）じて自己（自己）が髪（髪）揃（揃）せ（せ）け（け）る（る）如（如）何（何）く
 けん（けん）會（會）ふ（ふ）つ（つ）と（と）斷（斷）る（る）妻（妻）ハ（ハ）驚（驚）き（き）て（て）飛（飛）よ（よ）か（か）ま（ま）下（下）と（と）平内（平内）ハ
 比度（比度）の使節（使節）辞難（辞難）と（と）苦勞（苦勞）さ（さ）せ（せ）じ（じ）と（と）お（お）笑（笑）ひ（ひ）世（世）を（を）
 唯（唯）髮解（髮解）の方便（方便）と（と）祝（祝）し（し）直（直）と（と）其（其）も（も）家内（家内）お（お）酒
 盛（盛）及（及）と（と）徒士（徒士）小平（小平）太（太）は奴僕（奴僕）と（と）侶（侶）い（い）る（る）後（後）六人（六人）曉（曉）鷄（鷄）の翔擊（翔擊）
 と共（と）は我家（我家）と（と）い（い）る（る）東馬軍治（東馬軍治）ハ（ハ）豫（豫）て（て）命（命）の（の）一（一）のり

が（が）其（其）膏（膏）已（已）が（が）批（批）藏（藏）の骨董（骨董）の（の）不持（不持）し（し）家人（家人）ふ（ふ）も（も）知（知）ら
 せ（せ）ず（ず）他（他）へ（へ）道（道）送（送）よ（よ）行（行）鉢（鉢）よ（よ）見（見）せ（せ）城内（城内）と（と）逃（逃）出（出）平内（平内）が（が）旅（旅）の
 徑路（徑路）幸（幸）音信（音信）上（上）と（と）屈（屈）竟（竟）の場（場）と（と）謀（謀）し（し）合（合）せ（せ）入（入）金子（金子）と
 取（取）ら（ら）せ（せ）て（て）世（世）伏（伏）と（と）高（高）後（後）路（路）傍（傍）の樹林（樹林）ハ（ハ）躲（躲）入（入）る（る）今（今）や（や）く（く）と（と）待
 居（居）り（り）平内（平内）ハ（ハ）已（已）は房州（房州）と（と）急（急）ぎ（ぎ）ら（ら）る（る）其日（其日）の晡時（晡時）は（は）
 漸（漸）く（く）音信（音信）山（山）よ（よ）さ（さ）と（と）道路（道路）甚（甚）崎（崎）嶮（嶮）り（り）な（な）れ
 奴僕（奴僕）と（と）休（休）ん（ん）と（と）自（自）ら（ら）轎子（轎子）り（り）出（出）摘（摘）は（は）鏡（鏡）り（り）ける（ける）時（時）は
 五月（五月）の空（空）は（は）定（定）め（め）ら（ら）る（る）曇（曇）晴（晴）の天（天）氣（氣）と（と）疾（疾）く（く）寒（寒）く（く）なる（なる）雲
 井（井）と（と）子規（子規）の兩（兩）三（三）声（声）啼（啼）疲（疲）り（り）な（な）ま（ま）い（い）平内（平内）眉（眉）と（と）顫（顫）身（身）め（め）あ（あ）ら（ら）心
 得（得）ぬ（ぬ）物（物）る（る）是（是）迄（迄）房（房）の（の）地（地）は（は）杜鵑（杜鵑）ある（ある）夏（夏）と（と）吹（吹）く（く）昔（昔）時



あまのり
 ちかひのり

宋の末世^{そくせい}邵康節^{しやうかうせつ}先生^{せんせい}天津橋^{てんじんきやう}にて杜宇^{とこ}とては又^{また}楚梁^{しりやう}の
 区^くを先^{せん}知^ちせし^しらう^{らう}人^{ひと}今^{いま}安房^{あんぼう}の里^{さと}見^み民^{たみ}の物^{もの}か^かひも^も是^{こゝろ}より
 衰^{すい}癯^{さう}の祥^{さむかひ}あり^{あり}や^やし^し長^{ちやう}歎^{たん}息^{いき}し^し熾^し然^{ぜん}として^{して}樂^{らく}を^をま^まや^やく
 いて^{いて}居^ゐた^たら^らし^しと^とり^り

忠孝比王傳卷之三終



